場所　〒502-0812 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ

千秋（せんしゅう）まちかど文庫 通信

第180号
2023年7月

運営委員会発行（記録:安藤彰浩、編集:中川健史）（主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第180回哲学カフェ例会（2023.6.8）

≪中国と仲良くできないものなのか？≫

「相手のことを尊重し、よく知るように心がけ、相手から尊敬されるために何をしたらよいか考える。このことの大切さが共通認識になったと思われます。戦争への準備でなく、平和への準備、粘り強い対話を。」

＜問題提起＞　主宰者：吉田千秋

中国は日本のお手本で、漢字をはじめ文化・文明（政治の仕組みや宗教や哲学等）多くを中国から学びました。しかし、明治以降しばしば中国の主権を侵害し、挙句の果て、中国の奥深くまで侵略しました。戦後、日本の敗戦で中華人民共和国が誕生し、70年代に日中は国交を回復し、その後、平和的な交流を深め経済的な関係を発展させて来ました。しかし現在、著しい経済成長を遂げた中国は権威主義的な独裁的政治の傾向を強め、対外的には覇権主義的な強硬姿勢で、しばしば近隣諸国との間に緊張関係を作り出しています。

・こういう状況で、亡くなった安倍氏は「台湾海峡は日本の生命線だ」と時代錯誤的に緊張を煽り、岸田首相はロシアによるウクライナ侵略を口実に、アメリカの指示のもとに大軍拡を一気に推し進めています。だが、気候変動の問題を始め地球規模の様々な課題に出来るだけ多くの国が協力して望む必要があります。そのためには独裁対民主主義の単純な二元論の見方は適切ではありません。

・発展途上国はもちろん中国やロシアとも対話を進め、互いに尊重し合う関係を構築して行く必要があります。特に中国とはできる限り仲良くして行くことが大事です。中国を敵視する態度を煽るのではなく、仲良くするために何ができるかを考えることが求められています。今日は、長年中国での交易関係を続けてこられた小島さんの話も聞いて意見交換できたらと思っています。

小島正憲さん（左）と吉田千秋さん（右）

＜提言＞　小島正憲さん
（アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事）

・私たちはまず“他国と仲良くやって行く”ってどういうことなのかを定義する必要があります。中国との関係を考える場合、中国をどう見るのか、中国は日本をどう見ているのか。中国は余りに多くの顔を持っています。見る人によって異なるものが見えると言っても決して言い過ぎではなりません。

・中国とは学生依頼の長い付き合いで、天国と地獄を経験しました。1991年縫製業者として中国に進出、従業員25人の工場から始め、5年で5の工場、従業員一万人の事業に規模を拡大しました。お金も沢山稼がせて頂きました。湖北省で外貨獲得一位の貢献で、中国側から感謝されました。1997年、国家表彰され永住権も授与されました。

・今でも私たちは中国というと、働き手は幾らでもいると思いがちですが、近年明らかに人手不足に陥っています。世界の企業が多数中国に進出して人を探

していることが関係していますが、日本と同じ様に少子高齢化社会になりつつあって、労働人口が減少傾向にある事実を見過ごせません。私は結局2010年に工場を中国から、バングラディッシュ、ミャンマー、フィリピン等に移転させました。中国と仲良くなるには、まず自分目で事実をしっかり確かめる必要があるということです。

・さらに、中国建国後の歴史を知っておくことが大事です。三つの時代に分けて考えることができます。

毛沢東時代：日中戦争、太平洋戦争、ソビエトの参戦、様々の出来事が偶々重なって、毛沢東率いる中国共産党が権力を掌握して、中華人民共和国が誕生しました。その後、自力更生による国作りを目指しましたが、経済的にうまく行ったとは言えません。地主から土地を取り上げ、農民は国家の管理下で働くことになりました。人は沢山いて、労働力は豊富でしたが、国は貧しいままで、思想ばかりが突出していました。かなり美化された文化大革命もその一例に他なりません。

・鄧小平時代：改革開放の時代です。経済優先で、市場を外国の資本に開放し、いわば他力依存で国を豊かにしようとしました。政治体制を維持したまま、市場経済を導入する改革は成果を上げ、中国は著しい早さで経済成長を遂げました。反面、鄧小平時代は、当たり前の様に官僚たちが賄賂を取って私腹を肥やす、組織全体に腐敗が蔓延した時代でもありました。

習近平時代：現在の指導者習近平氏は、反腐敗を掲げ、党組織の統制を強化することで求心力を高め、自分の権力固めをしました。強権的な傾向が強く、抗議活動や政府批判を抑え込むことを徹底して行っています。愛国心教育や対外敵視政策で国民の不満を外に向けさせ、思想言論統制も強化しています。経済の他力依存は相変わらずで、「一帯一路」構想は、裏を返せば中国経済が外国資本に依存していることの証と見なすことができます。

・目下の大問題は人手不足が深刻であることです。少子高齢化が急速に進む一方で、定年（男60～65歳、女55～60歳）が早く、働き手が極端に少なくなっています。年金制度は破綻の瀬戸際にあるといっても言い過ぎではありません。報道で知る中国からは、あくまで強面で脅威を感じてしまいますが、本当は大きな問題を抱えています。中国と仲良くできる道は日本が尊敬されるようになることで、その一つが高齢化社会の「先進国」日本が良い見本になり、協力していくことだと思います。

＜意見交換（質問及び回答）＞

＊一万人規模の工場の閉鎖は難しい。どのようにやり遂げたのか知りたい。自分は中国で電気部品を売っていた。中国のことをもっと勉強しなければいけないと思うが、掴み所がなくて、どこから手を付けたらいいのか分からない。

＊日本と中国の関係が誤った競争で争ったり、いがみ合ったりして敵意を抱き合う関係であってはならない。日本人が中国人から尊敬されるために何をすればいいのか。小島さんの提起された高齢化社会の課題克服の視点は大切だ。

＊高校では漢文の授業で、孔子の論語や杜甫や李白の詩文など中国の古典を読んだ。内容は興味深いものだったが、残念ながら中国の現実とかけ離れたもので、現代の中国を学んだという印象は無かった。今日は、現実体験に基づく生きた中国についての話

が聞けたことがよかった。

＊中国で事業を展開する場合、中国企業と合弁することを義務付けられる。中国企業は西側でほぼ自由に事業を営むことができるから、これはフェアーな条件ではない。この合弁を通じて中国企業は急速に技術力を高め、西側と競争できる実力を付けたと言わ

れる。最近、西側諸国は遅まきながらこうした不公平なやり方を問題にする様になった。小島さんの企業活動においてこの点はどうだったのか。

＊TikTokの様にIT分野で欧米企業を上回る技術力を持って、多くの利用者を獲得している中国企業の話も聞く。実際にどうなのか興味深い。

＊（小島さん）　中国経済は全体として過大に評価されている。だが、問題点は外国からの投資の部分がかなり大きいことである。昔は、一国の経済の大きさを計る物差しは、今のGDP（国内総生産）でなくGNP（国民総生産）だった。外国資本が撤退すれば、中国経済はつぶれる。最近、外貨の持ち出しがあって、中国の外貨準備高が4兆ドルから3兆ドルに大幅に減少した。そのために、中国政府は外貨持ち出し規制を行った。

＊金の持ち出しが制限されているのなら、先程の話しの様にどうやって工場を中国から東南アジア（バングラディッシュ、ミャンマー、フィリピン）に移転させることができたのか。

＊（小島さん）　人手不足は深刻で中国で工場を維持することは困難になっていた。それで抜け道を探した。中国は数年前から「一帯一路」と銘打って広域経済圏を作ろうとしている。この経済圏に含まれる国々への金の持ち出しは制限の対象にならない。これの枠組みを利用して工場を移転させることができた。

＊話しの様な中国政府の措置は通常禁じ手と見なされている。外貨の持ち出し禁止といった措置を取ると、世界の為替市場で信用を失い当該国の通貨の価値が一挙に下落する。過去にアルゼンチンでの失敗例がある。

＊（小島さん）　中国政府の通貨の管理は徹底していて巧妙で、少なくともこれまでは信用不安を引き起こさない様にうまくやって来た。だが、中国は他にも沢山の問題を抱えている。社会の高齢化は深刻である。人手不足でありながら、失業問題も起きている。特に都市部では、一人っ子政策で子どもは大事に育てられ、多くが高等教育を受ける。そうした人たちは選り好みが激しい。彼らは、工場の働き手になろうとは思わないが、望む様な高給を期待できる職は中々見つからない。一世代、二世代前の人たちの様な、何をやってでも生きて行くという気力がない。

＊中国には二種類の戸籍があると聞いている。農村部の人間と都市部の人間は戸籍で区別されていて、農村の人間が勝手に村を出て都市で働くことはできないのではないか。

＊中国の台頭で欧米中心の世界秩序が揺らいでいる。もはや欧米のやり方が国造りの唯一の近代化モデルと見なされなくなっている。

＊チャットGPTに「中国と仲良くやっていく道はあるか」と質問すると文化交流という回答がある。70年代の初頭、中国選手を招いて名古屋で卓球大会が開かれた。これが日中国交正常化の出発点だった。原点回帰する必要がある。軍事的な対立ではなく、人と人の交流を活発化する道を探ることが大切である。現在の状況は好ましくない。

＊国際情勢の緊迫化は中国の国民性も関係している。中国人は面子を重んじる傾向が強い。日本人に比べても際立っている。だから批判に対して激しく反応する。中国政府の対応も全く同様である。

＊中国人を始め東アジアの人たちの反日感情は、少なくとも以前は日本に対する憧れと裏腹の所があった。日本は近隣諸国の反日感情に対しては、条件反射的に反発しない様に注意する必要がある。

＊（小島さん）　戸籍の区別は現在流動的である。昔は厳格に守られていたが、今はあって無い様な規則

である。戸籍絡みの問題はほとんど金で解決する。
　面子の問題に関して言えば、中国人は人前で注意されたら侮辱されたと感じて激しく反発する。筋が通っていなくても執拗に反論する。こうした傾向はバングラディシュの人たちにも強い。
　情報統制が強いので、中国の人たちはウクライナ戦争のことも、先の共産党大会で共産党前総書記胡錦涛が排除されたことも知らない。
＊個人的に中国に憧れる部分もある。強権的な部分は賛成できないが、人口14億の国を統治するのは大変だと思う。仲良くするのは難しい。だから平静にただ是々非々で淡々と付き合うことだ。

＊小島さんと同じ様に中国でビジネスを展開していて、ある程度地元の人の見方も知っている。概して日本の製品の評価は高い。日本製品は質が高い、日本製の機械は壊れない、と普通中国人は思っている。
＊日本が中国を含め外国から尊敬される立場にあるかどうか。そういう視点で考えたことがなかった。相手が抱える問題を解決する助けができれば、良好な協力関係を築けるかもしれない。

＊協力が必要な分野は沢山ある。中国の環境問題は深刻だ。温暖化対策だけでなく、PM2.5の主な要因である黄砂による大気汚染の問題で、被害は日本に

まで広がっている。PM2.5対策で協力が必要だが、うまく行くか分からない。

＊日本は中国侵略の歴史をしっかり認識する必要がある。この問題と真剣に取り組んで来たドイツと対照的に、日本は謝罪も総括もまともにできていない。日本人の真の評価に関わる問題である。中国は民主主義の国ではない。従って、話が通じない部分が多々ある。しかしそれでも、日本は自らの歴史を反省して襟を正す必要がある。戦争に向かうことはもってのほかというしかない。そういう危険がある様にも見える。

＜意見交流の最後に＞　吉田千秋

・つい先日シンガポールであったアジア安全保障会議の席で、シンガポールのウン国防相から日本の歴史認識の不十分さを指摘する発言がありました。ウン氏は、ドイツが行った様な徹底的な過去の清算が日本ではまだ行われていない、と指摘し、中国との関係を改善すること、及び、軍事力強化について、しっかり説明して周辺国を安心させることの必要性を訴えました。
・アメリカは盛んに中国脅威論を訴えていますが、他方で、軍事的衝突回避のために対話の可能性を模索しています。日本には過去の戦争の誤りを踏まえ、中国と仲良くなる道を探る責任があると思います。対話は対外関係の基本、大前提であることを忘れない様にしなければなりません。
・大阪下町育ったボクは、大勢の在日朝鮮人の人たち

とともに育ちました。そこで見聞きしたこと、考えさせられたことは大切な財産です。だが、中国人との交流は、高校生時代に、二人の在日中国人との一時的な友人関係以外に、余り交流がありませんでした。なんといっても仲良くなるには相手をよく知ることですね。

・日本は中国との関係を改善させる努力を通じて、世界の平和にも大きな貢献ができると思います。何よりも世界に誇る平和憲法を持っていますし、戦争による核兵器被害国ですし、国民の平和意識はまだまだ根強く残っています。国家・政治レベルだけでなく、国民間、人間同士の交流を活発に展開し、戦争ではなく対話を粘り強く進めたいものです。

＜6月例会感想、意見、便り、7月記念行事など ＞

〇＜中国と仲良くできないものか？＞

小島さんや皆さんの話をなるほ、と聞いていました。仲良くするには物・金・人を使うこともありますが、小島さんの「日本発新思想・新哲学で日本(人)が中国(人)から尊敬されること」、というお話は目からうろこでした。

ある国(北アイルランド)の校長先生が教育に哲学を取り入れているというテレビ番組を見ました。友達とは何だろう？　と考えます・・・いいなあと思いました。物・金・人ではなく、哲学が鍵となるのではないかと思いました。　（子猫）

〇＜アジアでは共に戦わず、を大前提に＞

小島さんの話は興味深くておもしろく、本だけの知識でわかったつもりになっていた中国に対する思い込みにかなりの修正を迫る話でした。ただ質疑時間が短くもっとお聞きしたいことがたくさんありますので、近いうちにもう一度小島さんの話が聞けたらいいなと思いました。また日本は二千年も前から大陸からの影響および関係性に苦慮して存続してきた国ですから、まじで脱亜入欧から脱欧入亜への変換が待ったなしの時を迎えたと思います。その状況の中で一番重要なのはアジア人は共に戦わずだと考えます。なぜなら、アジアで戦乱があって一番喜ぶのは欧米です。多少腹の立つことはあっても共に戦わずを大前提に行動するべきだと自分は思います。

（たなか）

〇＜中国での情報操作と「台湾危機」説＞

今回の小島さんの話で、十数年前中国各地で暴動が多数起きたと報じられたがフェイクだということと、日本で報じられる権力中枢の権力闘争などについては、中国人はほとんど知らないということが興味をひいた。

昨今の安保問題の震源たる米での「台湾危機」説は、軍予算の増額を画策する海軍司令官の発言だと

指摘する評論家やジャーナリストも多い。だが、そうであれば前段の「暴動話」と重なる可能性がある。またこの危機話を強調する米の議員などの背後には、「東アジアに戦略拠点を移す」リバランスを喧伝するロビーストや軍産複合体の存在がある可能性が高い。その関係性を明らかにしない米メディアの問題も透けて見える。

中・米の国内はもとより国家間も激しい情報戦の大舞台、一皮も二皮もめくらないと真実は分からないのに、わが国の政府はこれに前のめり。その点「危機説」を振り回しつつも、両政府本体は一本足打法にならないようにしている。注目点ではないか。

（フィリピンウォッチャー）

〇＜中国との長い交流を忘れないで・・＞

「中国と仲良くできるのか？」という問いに対して、まず、これは、国家間なのか、国民間なのかで、回答は一概に言えないと感じた。国民同士の交流では、仲良くできるものと思う。しかし、国家間では、簡単ではないと思う。どっちにせよ、日本人はまず、中国の歴史的・文化的背景を、もっと知ることが大事であろう。明治以後、戦後も含めて、中国を忘れ(？)、欧米一辺倒でやってきた日本は、反省すべきである。実業家、小島正憲さんのお話は、実体験に基づいており、面白くかつ迫力のあるものでした。やはり、日本は戦争をしない国として尊敬される国になること

が大事で、このことが中国との関係を改善するのみならず、国際平和にも貢献することにつながる、という見方に感銘を受けた。　（MS）

〇＜「生活者」の視点で平和的な関係を築くこと＞

6月の例会では中国で1991年から縫製業を立ち上げ約20年展開してこられた小島正憲さんのお話を聞いた。事業活動、役人との対応、従業員の確保などビジネスに伴う多様な活動の中国社会での展開についてについて興味深く聞いた。新聞、テレビでは見られない生きた中国社会を見た感じがした。“生活者”の中で外国を見る時、平和が望ましく、国と国が戦争にならないよう政府間の外交的接触が必要と私は考えた。　（アダム・スミス）

《15周年記念講演への期待・質問》

＜その1. 大橋健司さん＞

ロシアと言えば、1917年のロシア革命や1992年のソ連崩壊など、世界史を画する事件が記憶に残っているが、ロシアの一般市民にはどんな社会だったのか、実情はあまりわかっていない。そこで今回、ロシアを長く観察してこられた研究者のお話が聞けるのは、喉から手が出る好企画だ。2，3質問をします。まず基本的なこととして、旧ソ連は社会主義を標榜し、計画経済で一定の成果を上げた時期もあったものの、内部矛盾と冷戦構造激化の中で、3/4世紀で崩壊した。その時期を生きた市民は、あの時代をどう振り返っているのか？　マイナス面ばかりだったのか？

第二に、ソ連崩壊後の10年余はひどい混乱の時代だったというが、そのトラウマが権力の肥大化を生み、同時進行の政治腐敗やメディア統制とも相まって、昨今の「暴走」に至ったのではないか？

第三に、今日のプーチン政権の「狂気」が鎮まるポイントは何か？　それに対して日本には何ができるのか？

大所高所からのわかりやすい解説を期待します。

＜その2. 三戸光則さん＞

私の好きな格言の一つに「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」がある。

昨年2月、ロシアのウクライナ侵略戦争にあたふたしながら、「ロシアよ、戦争止めろ！」「プーチンは国連憲章を守れ！」を＜九条の会＞のスタンディングで叫んできた。

やがて戦争が長期化するとメディアも「そもそもロシアがなぜウクライナ侵略を始めたのか？」などを取り上げるようになった。私自身は、ウクライナがソ連の一部という漠たる認識であったし、あのチェルノブイリ原発がウクライナにあったことを知ったのは今回の戦争によってである。1989年のソ連崩壊でさえ遠い国の大事件であるということを超える認識を深めることは無かった。

しかし、今回、ロシアの侵略戦争で食料危機やエネルギー危機を目の当たりにして自分はいかに「愚者」であったかを、いや「愚者」に留まっていてはいけないかを思い知らされた。竹森先生の話を聞いて少しでも「賢者」に近づきたい。

＜その3. 井川敏郎さん＞

何年も前ですが「島中学校区九条の会」で、竹森さんから憲法についてお話を聞きずいぶん勉強になりました。今回は現代世界を揺るがし、かつご専門の分野での講演ということでとても期待しています。その上で次の3点を質問したいと思います。よろしくお願いします。

①ソ連解体の際（1991年）ロシアの大統領報道官が、ウクライナとの国境（ドンバス地方）見直しを示唆した。これは現在のプーチン政権によるウクライナ侵略の言い分と重なるが、このような認識は過去も今もロシア国内では共有されているのか。

②「タタールのくびき」は、ロシア・ウクライナ双方の歴史認識や政治体制に、今も影響が続いているのか。続いているとすれば、どのように影響を及ぼしているのか。

③ロシアやウクライナの憲法とそれに基づく政治のあり方は、私たちが考える「立憲主義」と同じなのか。

＜この一本＞　O・ハーマナス監督、カズオ・イシグロ脚本『生きる：LIVING』2023年3月公開

ボクの映画人生で最も感銘を受けた一つは、黒澤明監督の「生きる」である。
若い頃に観たのに、いまだに志村喬が最後の場面でブランコに乗って口ずさむシーン（大正期に流行った「ゴンドラの唄」）が脳裏に焼き付けられている。

その名作をノーベル賞作家カズキ・イシグロが脚本を担当し、見事にリメイクした作品がこれである。時代は同じ戦後復興期だが、舞台をロンドンの下町に移し、新たに「生きるとはどういうことなのか」を問うたのがこの映画である。

登場人物、筋書きは驚くほど黒澤作品を踏襲している。主人公は市役所の中間管理職の市民課課長で、新作ではお堅いイギリス紳士。部下に煙たがられ、毎日事なかれ主義の事務処理に追われている。家庭では息子夫婦に疎んぜられ、孤独さ、むなしさを感じて生きている。

そんな時に癌を宣告され、人生をやり直そうと仕事を放棄してリゾート地で遊びほうけるがしっくり行かず、職場で部下だった生き生きした若い女性に再会し、彼女から課長のあだ名は死んだも同然の＜ゾンビ＞と教えられ、「何かを作る」ことを示唆される。職場に帰った彼は、小さな公園を作って欲しいとの請願書を想い出し、その実現に全力を尽くす。最後の場面も黒澤作品と同じく、雪の降る夜に、できた公園のブランコに揺られ、スコットランド民謡「ナナカマドの木」を幸福感に浸りながら口ずさむ・・名優ビル・ナイが。

イシグロは黒澤と異なった「人生」の視点を示したのは、またもや事なかれ主義に戻る役所にあって、若者に託した期待だった。混迷の現在にあって、明日の希望はここにある、と改めて教えられた。ぜひ観てほしい映画である。　（sensyu）

＜このTV映像＞「100分de名著」：ショック・ドクトリン

世界を席巻する新自由主義経済の闇を抉り出したナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン』を、この6月、NHK「100分de名著」が4回シリーズで取り上げました。

カオス化する世界！　地球温暖化、ウクライナ戦争と核戦争の危機、世界富豪トップ8人と貧困層36億人分の資産と同じという格差・・・どれをとっても人類の破滅を招きかねないおぞましいまでの社会的事象。これらに通底する新自由主義経済の正体を『ショック・ドクトリン』は見事に暴いています。

原書は現代の「カオス解体新書」と言ってもいいでしょう。分厚いうえ、上・下巻もあるこの本を、『貧困大国アメリカ』等で著名なあの堤未果さんがわかりやすく解説してくれています。第1回は「『ショック・ドクトリン』の誕生、第2回は「国際機関というプレーヤー・中口でのショック療法」、第3回は「戦争ショック・ドクトリン」、第4回は「日本、そして民衆の「ショック・ドクトリン」」です。

この番組のテキストは安価（税込み６００円）で入手できます。ぜひ手にとってお読み下さい。なお、堤さんは『堤未果のショック・ドクトリン　政府のやりたい放題から身を守る方法』（幻冬舎新書　）を今年刊行されました。あわせて読まれるようお薦めします。

この映像を収録した録画を保管しています。よろしければ連絡願います。

（三戸光則、080-5160-4462）

哲学カフェ　第29期(2023年前半)例会予定　＊毎月第2木曜日、午後7:00～9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第181回例会 7月15日(土) 14:00～16:30	**設立15周年記念行事：講演と討論**　◆会場　長良川スポーツプラザ テーマ「ロシアとウクライナ戦争・・日本はどう向き合えばいいのか？」 講演：竹森正孝さん(岐阜大学名誉教授、ロシア・東欧比較憲法研究) **リアル参加＋オンライン配信(事前申し込み必要)も行います。**
第182回 8月10日(木)	**「沖縄を再び戦場にさせないために・・ 緊迫した現地を訪ねた人に話を聞いて」** ＊西南諸島は「台湾海峡有事」を煽る政府によって、ミサイル基地化を強行推進されています。 ＊だが島民の反発も急増。そこに参加された嵯峨崎聖子さんの話を聞いて意見交換します。
第183回 9月14日(木)	「世界125位、なぜ男女平等は進まないのか？」 ＊今年のWEFの発表では日本はまたも下がって、146カ国中の125位。東アジアでは最下位。 ＊特に政治と経済の分野での遅れがひどい。何が問題で、どうすれば良くなるのか考えてみたい。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。
口座記号・口座番号 00810 1 142912
加入者名　哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫
「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!
http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de　ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや　アラカルト

★ある新聞の小さな記事が目に入った。有名なチャイコフスキー国際コンクールに出場した田所光之マルセルさん(日系フランス人)が、第2次予選でウクライナ伝統の舞踊音楽をまじえたプログラムで演奏し、注目を浴びたということだ。

★彼は「敵味方に分かれ、いろんな恨みが渦巻いている場所(モスクワ)でこそ、多様な国の音楽を弾きたいと思いました」と語った。残念ながら最終予選に残れなかったが、順位よりも「早く戦争が終わってほしい」という音楽のモチベーションこそ大事だと付け加えた。

★ロシアのウクライナ侵略後、芸術、文化、スポーツなどの分野で、欧米諸国(日本を含む)から、ロシア排除(ベラルーシを含む)が様々行われた。ロシア出身指揮者の排除、ロシア音楽作品の演奏停止。さらにテニスNo.1アザレンカとの試合後の握手拒否など。

★何だかわけわからない哀しさがよぎり、戦争への怒りがふつふつと湧いてきた。戦前様々な戦争・紛争を交えてきたロシアではあったが、何と言っても、ロシア文学、ロシア音楽、ロシア民謡は日本人がこよなく愛するものだった・・トルストイ、チャイコフスキー、カチューシャなどなど。

★戦争は民衆が起こすのではない。国家権力を持っている者たちが、いつも「国民のため」と喧伝して民衆を巻き込んで起こす。国家間の争いである戦争は、民衆どうしの共通の喜びであり、いのちの泉であり、人生の糧でもあった芸術、文化、スポーツを戦争をやめさせる架け橋ではなく、戦争を促進させ、憎悪を駆り立てる道具にしてしまう。いまこそ芸術・文化・スポーツの交流を！

(吉田千秋)